

食育における異分野の融合に関する考察 —食育のより効果的な実践を目指して—

本田藍*¹・中村修*²

A study on the assimilation of different fields into dietary education

—An aim to implement more effective dietary education—

Ai HONDA・Osamu NAKAMURA

Abstract

To examine the potential for improving dietary education through assimilating different fields, we arranged and classified the contents of 114 studies that had been contributed to the Journal of Japanese Society of Shokuiku until its most recent publication. Overall, 58.8% (67 articles) of the studies addressed cooking, nutrition, dietary habits, and meals, whereas 20.2% (23 articles) assimilated different fields. Of these, five articles reported on implementation done with definite objectives. One study reported results of questionnaires administered before and after an implementation that used a control group, but no studies were found that discussed the results combined with those from different fields. In contrast, we were able to find the possibility of implementing more effective dietary education by combining results obtained from different fields in existing research.

Key Words : Dietary education

1. 序論

2005年に食育基本法が成立されて以降、様々な場で多用な食育活動が実施されてきた。2007年には、日本食育学会が設立し、学術的な研究も推進されている。

2009年度、上岡らは、新聞記事から食育関連情報を9分野に分け、分析している(上岡他、2009)。この中で、「食育には、食生活や健康、栄養、医療、農業、環境、教育など様々な事柄が関連するため、これらに関連する様々な主体(あるいは行政)が食育

*¹(独)日本学術振興会特別研究員 RPD

*²長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

受領年月日: 2015年5月27日

受理年月日: 2015年8月20日

を推進している」としている。そして、当時は、複数の実施主体が連携して食育を実践する機会は少なく、実施内容も、実施主体に関連のある事柄が独立して実施される場合が多かった。

実際、筆者らが2007年に実施した137事例の食育活動(2004~2006年)の内容調査では、食育は「生活習慣病に関する知識と予防方法の習得」(全取組のうち、2.0%)、「食に関する正しい知識と望ましい食習慣の習得」(30.9%)、「地域の産物・文化の知識の習得や体験活動」(60.4%)、「食品の品質、安全性に関する知識と判断能力の習得」(6.7%)、「地域の産物・文化の知識の習得や体験活動」(60.4%)の4つの項目に分類され、それぞれの項目が組み合わせられたような食育は見られなかった(中村他、2007)。

しかし現在は、平成 26 年版食育白書（内閣府、2014）において、食育推進施策の課題として、多様な主体が相互に連携した取り組みの推進があげられている。地方自治体の食育推進計画においても、農政部、教育委員会、保健福祉部等複数の部署が連携した食育の推進を明記し、様々な関係者が連携して食育を推進している地域も見られる。

そのため、例えば、それまで個別に実施されていた健康と農業を組み合わせたような、異分野が融合した食育も実践されている可能性がある。様々な分野の食育を組み合わせ、融合することで、教育の受け手にとってわかりやすく具体的で、生活に根差した内容となる可能性がある。

そこで、本研究では、現在まで発行されてきた日本食育学会誌に投稿されたすべての先行研究の内容を整理、分類し、分野が融合した取り組みの実施割合や実施内容、成果について明らかにすることで、より効果的な食育について検討することを目的とした。

2. 調査方法

2.1 食育分類項目の整理

分類項目は上岡らの9つの分野を参考に作成した。本調査は実施目的と内容に焦点を当てるため、9つの分野のうち、実施主体を表す「学校に関連するもの」「家庭に関連するもの」「行政に関連するもの」を削除した。また、「食生活・食習慣に関連するもの」を、栄養に関連する「食生活」と文化的な要素の強い「食習慣」とに分類し、「食生活」は「食事に関連するもの」と「調理・栄養に関するもの」を統一し「調理・栄養・食生活・食事」とした。食習慣は、家庭関連のキーワードを含めて「食習慣・食文化」とした。「体験・イベント」は、具体的にどんな体験・イベントであるかを判断し、分類することとして、

各分野に振り分けた。

その結果、4項目、「調理・栄養・食生活・食事」「農業」「健康・医療」「食習慣・食文化」に整理できた。さらに、以上の項目が組み合わせられた、「融合」、上記に該当しない「その他」の2項目を加えた6項目を分類項目とする（表1）。

2.2 調査対象

2007年10月の日本食育学会誌創刊号から、2014年12月までに投稿されてきた原著、調査報告、研究ノート、資料、講演、総説、食育実践事例報告、全114本を調査対象とした。

2.3 分析方法

1) 分類項目への振り分け

タイトルと抄録、序論、調査方法を精読し、最も適合する項目に振り分けた。

2) 融合項目の内容と成果の検討

複数の項目が組み合わせられた先行研究について整理し、異分野の組み合わせや実施内容、評価方法、成果などについて明らかにする。また、異分野を組み合わせることにより、どのような利点があったのか、またどのような成果が得られたのかについて検討をおこなった。

3. 結果

3.1 食育学会投稿論文の概要

食育学会投稿論文の形式は、原著56本(49.1%)、調査報告26本(22.8%)、総説11本(9.6%)、研究ノート(8.8%)、食育実践事例報告9本(7.9%)、講演2本(1.8%)となっていた。

対象は、児童生徒が最も多く、31.6%で、次いで大学生17.5%、保護者7.9%となっていた。

表1. 分類項目

項目	キーワード
調理・栄養・食生活・食事	給食・料理・調理・食材・加工・衛生・食生活・食事バランスガイド・食生活指針・朝食・朝ごはん・外食・食べ残し・欠食・食行動
農業	農業・地産池消・旬・地場・国産・自給率・体験
健康・医療	健康・医療・生活習慣病・成長
食習慣・食文化	家庭・家族・感謝・コミュニケーション・しつけ・マナー・団らん・習慣・食習慣・食文化・郷土
融合	上記複数項目の組み合わせ
その他	安全・行政・食育基本法・食育自体の総括的な研究等

3.2 食育学会投稿論文の内容分類

先行研究の内容は、58.8%が「調理・栄養・食生活・食事」に関するものであった。次いで、「融合」が多く、20.2%、「その他」11.4%、「農業」4.4%、「健康・医療」3.5%、「食習慣・食文化」1.8%となっていた（表2）。

年別に項目の増加・減少などの傾向や規則性を見出すことはできなかった。

また、内容が「融合」であった先行研究は、2012年が最も多く、年全体の35%を占めていた。

表2. 年別食育学会投稿論文の内容分類^{※1}

年		分類						合計
		1	2	3	4	5	6	
2007	N	0	1	1	1	1	0	4
	%	0.0%	25.0%	25.0%	25.0%	25.0%	0.0%	100.0%
2008	N	5	0	0	0	4	0	9
	%	55.6%	0.0%	0.0%	0.0%	44.4%	0.0%	100.0%
2009	N	10	1	0	0	4	1	16
	%	62.5%	6.3%	0.0%	0.0%	25.0%	6.3%	100.0%
2010	N	7	1	0	0	2	1	11
	%	63.6%	9.1%	0.0%	0.0%	18.2%	9.1%	100.0%
2011	N	8	1	0	0	3	1	13
	%	61.5%	7.7%	0.0%	0.0%	23.1%	7.7%	100.0%
2012	N	12	0	0	0	6	2	20
	%	60.0%	0.0%	0.0%	0.0%	30.0%	10.0%	100.0%
2013	N	17	0	2	0	0	4	23
	%	73.9%	0.0%	8.7%	0.0%	0.0%	17.4%	100.0%
2014	N	9	1	1	1	2	4	18
	%	50.0%	5.6%	5.6%	5.6%	11.1%	22.2%	100.0%
合計	N	68	5	4	2	22	13	114
	%	59.6%	4.4%	3.5%	1.8%	19.3%	11.4%	100.0%

※1: 調理・栄養・食生活・食事、2: 農業、3: 健康・医療、4: 食習慣・食文化、5: 融合、6: その他

3.3 融合項目の内容と成果

融合項目の内容を精読し、食育が実践報告でないもの、目的の記載がないものなど本研究の意図と合致しないものを省いた結果、23件中18件が排除され、5件が該当した（表3）。

最も多くみられた項目の組み合わせは、「調理・栄養・食生活・食事」と「食習慣・食文化」、「調理・栄養・食生活・食事」と「健康・医療」の組み合わせで、5件中2件みられた（表4）。次いで、「調理・栄養・食生活・食事」と「その他（環境教育）」（1件）、「調理・栄養・食生活・食事」と「農業」「その他（ヘルスツーリズム）」（1件）となっていた。

実施対象は、小中学生が最も多く、実施主体は、

大学と小学校・幼稚園等が多くみられた。

曾我ら（2009）は、小学3、4年生40名を対象に、栄養教育と環境教育を組み合わせ、「栄養バランスの取れた食事」に加え、「食料自給率」や「野菜の花や旬の時期について」といった内容の教育をおこなっている。しかし、栄養教育と環境教育を組み合わせることによる利点や具体的な成果は述べられていなかった。

三田村ら（2010）は、ヘルスツーリズムに参加した子どもと保護者102名を対象に、食の講義と農作物の収穫体験、野菜の調理を組み合わせた取り組みを実施している。ヘルスツーリズムと食育を組み合わせることに関して、「参加者の興味をそそりながら行動変容への動機づけを図り、調理実習を通じたスキルの体得、さらにツアー中に提供する食事内容を整備することで食環境への働きかけもできる」と述べ、高い効果が期待できるとしている。実践の結果、「野菜嫌いの子どもの9割以上が嫌いな野菜を残さず食べることができた」と報告しているが、ヘルスツーリズムと組み合わせた結果であるかどうかは検討がなされていなかった。

菅原ら（2012）は、4、5歳児を持つ母親24名を対象に、子どもの健康な発達を食生活から支えることを目的に、6回の食育教室を実施している。食育と子どもの健康づくりとの組み合わせについて、「健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切である」と述べている。実践の結果、対象群を設定した実施前後の質問紙調査の結果、母親の関心が高まり、母親と子どもの食行動においても改善が認められた。健康な心と体への影響については述べられていなかった。

堀田（2012）は、5、6歳の園児の母親410名を対象に、小児生活習慣病の予防を目的として、手作り間食の促進・栄養成分表示の内容の食育通信を毎月発行している。その結果、園児と一緒に間食を作る母親が増加したと報告している。食育と小児生活習慣病予防とを組み合わせることについては、「母親への健康教育は幼児の食生活改善につながり、生活習慣病予防になると考える」と述べられていたものの、生活習慣病予防への成果への言及は見られなかった。

磯部ら（2014）は、中学3年生158人を対象に、保育と食に関する学びを同時に得ることを目標とした家庭科の授業を実践している。この保育と食育の組み合わせについて、「題材に「幼児の食生活」というテーマを取り上げ、幼児期の「食」について学習

することで自らの食生活についても顧みることができるよう授業を計画した」と述べられている。実践の結果、中学生の「調理技術の自信度」に改善がみられたと報告されている。しかし、その成果が保育をとりいれたことによる成果なのかどうかについては言及されていなかった。

表 3. 異分野融合の食育実践

文献	対象	目的	成果	融合
曾我他 (2009)	小学3, 4年生40名	地域の生産者に感謝する気持ちを育てること	自由記述の感想	記述無
三田村他 (2010)	子どもと保護者計102名	野菜嫌いをなくし、最終的には野菜の摂取量を増やすこと	実施後のアンケート調査	記述有
菅原他 (2012)	4, 5歳児を持つ母親24名	子どもの健康な発達を食生活から支える	対象群を設定した実施前後のアンケート調査	記述有
堀田 (2012)	5, 6歳の園児の母親410名	母親の生活QOLの向上	配布前後に実施したアンケート調査	記述有
磯部他 (2014)	中学3年生158人	保育に関する学びのみならず食に関する学びも同時に得ること	実施前後のアンケート調査の結果	記述有

表 4. 融合項目の内容分類

	調理・栄養・食生活・食事	農業	健康・医療	食習慣・食文化	その他
曾我他 (2009)	○				環境教育
三田村他 (2010)	○	○			ヘルスツーリズム
菅原他 (2012)	○		○		
堀田 (2012)	○		○		
磯部他 (2014)	○			○	

4. 考察

本研究において、異分野が組み合わせられた取り組みは2割近くみられたものの、異分野の融合を意識して実施されていた先行研究は、5件しか見られなかった。さらに、成果を、対象群を設定した実施前後の質問紙調査等、学術的に記録している調査は1件のみであった。また、異分野を融合した成果につ

いて言及している先行研究はみられなかった。

国においても、異分野が融合した食育の取り組みは報告例は少ない。平成26年食育白書では、生産者（農林漁業関係者）、栄養関係者、教育関係者、保育関係者、環境の関係団体、自治会など多数の地域の関係者と連携した活動が報告されている（内閣府、2014）。しかし、その内容は、「農産物を栽培・収穫し、調理してみんなで一緒に食べ、さらに、地域で育まれてきた知恵を伝え合い、また次世代に伝える」ものとなっており、異分野を融合してより効果的な取り組みをおこなうという視点は記載されていない。そのため、関係者間の連携は進んでいるものの、内容に関しては、食農教育、文化の伝達の域を超えていない。

このように、食育基本法が成立して10年たった現在も、食育の異分野融合は十分に進んでいるとはいえず、一つの事業の中で組み合わせられることがあっても、積極的に推進・普及されてはいないと推察される。

しかし、本調査において、ヘルスツーリズムや環境教育、農業体験と食生活改善等を組み合わせることにより、対象の興味を高め、行動変容につなげる等のメリットが言及されていたことから、異分野を組み合わせることで、より効果的な食育を実践できる可能性は高いと考えられる。

5. 結論

異分野融合による効果的な食育について検討するため、現在まで発行されてきた日本食育学会誌114本に投稿された研究の内容を整理、分類した。その結果、先行研究の内容は、58.8%が「調理・栄養・食生活・食事」に関するもので、異分野が融合したものは、20.2%（23件）であった。そのうち、目的が明確になっている実践報告は5件であった。また、成果を、比較対象群を設定した実施前後の質問紙調査で記録している調査は1件であった。さらに、異分野を融合した成果について言及している先行研究はみられなかった。しかし、先行研究から、異分野を組み合わせることでより効果的な食育を実施できる可能性を見出すことができた。

今後は、異分野融合による食育を推進し、その成果について報告していきたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 26・40034 の助成を受けて

おこなった。

参考文献

- 合田芳弘 (2009) : 中学生・高校生の野菜への嗜好特性と心の発達との関連-緑黄色野菜の重要性-. 日本食育学会誌. 2, pp.65-72.
- 秋永優子・中村修・下村久美子他 (2008) : 食育基本法の趣旨を踏まえた学校給食献立改善のための評価の視点と試み. 日本食育学会誌. 2, pp.149-158.
- 秋永優子・中村修・下村久美子他 (2009) : 献立評価による学校給食の改善と効果検証の試み. 日本食育学会誌. 3, pp.157-168.
- 足立恵子・中山玲子 (2012) : 幼稚園における園児の食べ物の名前認知度と教諭の保育の中での食育との関連. 日本食育学会誌. 6, pp.197-206.
- 池田昌代・小根澤遥・上坂奈未他 (2014) : カフェテリア方式の学生食堂での料理選択行動における男女比較. 日本食育学会誌. 8, pp.9-18.
- 池戸重信 (2013) : 食品表示制度と食育一元化の動向を踏まえて. 日本食育学会誌. 7, pp.109-118.
- 石井克枝 (2012) : 家庭科教育における食育. 日本食育学会誌. 6, pp.157-162.
- 石川朋子・藤原葉子 (2014) : 大学院教育課程における高度食育専門家の育成お茶の水女子大学大学院「SHOKUIKU プログラム」. 日本食育学会誌. 8, pp.105-110.
- 石原領子・堀田千津子 (2013) : 目量り及び手量り測定での食品重量の把握について. 日本食育学会誌. 7, pp.21-32.
- 石原領子・堀田千津子 (2014) : 大学新入生の食生活に関する意識調査について. 日本食育学会誌. 8, pp.129-142.
- 石山久晶・比屋根哲 (2007) : 学校給食で地産地消を進める取り組みとそれを支える要因-岩手県旧水沢市を事例として-. 日本食育学会誌. 1, pp.11-21.
- 石山久晶・比屋根哲 (2008) : 学校給食で地産地消を進める取り組みの効果-地元産食材の使用率が高くなると食べ残しは減るのか?-日本食育学会誌. 2, pp.73-76.
- 和泉眞喜子・鈴木道子・早坂千枝子他 (2010) : 青年期における食生活感等とその形成過程に及ぼす食教育の影響. 日本食育学会誌. 4, pp.73-82.
- 和泉眞喜子・鈴木道子・千葉元子他 (2012) : 女子大学生の食意識、健康感、調理実践等に及ぼす大学

における食教育の影響. 日本食育学会誌. 6, pp.51-60.

- 磯部由香・早川巳貴・平島円 (2012) : 小学生を対象とした料理教室を通じた食教育. 日本食育学会誌. 6, pp.207-214.
- 磯部由香・平石裕香・吉岡良江 (2014) : 中学校家庭科保育分野における食育の実践. 日本食育学会誌. 8, pp.165-171.
- 伊東瑞歩・岡崎光子 (2011) : 学童の生活リズムと食生活に関する研究. 日本食育学会誌. 5, pp.193-202.
- 稲熊隆博 (2012) : トマトの健康効果. 日本食育学会誌. 6, pp.3-8.
- 上田由喜子・杉光江里香・太田原みどり他 (2011) : 5年生の学習「我が国の食料生産」と関連させた食教育の効果. 日本食育学会誌. 5, pp.135-140.
- 上田由喜子・小橋麻衣・山下治香他 (2014) : 教員志望学生の食育に対する意識. 日本食育学会誌. 8, pp.181-190.
- 上村葉子・西村敬子 (2009) : 子どもが楽しく学べる食育教材の開発-五色指人形手袋と歌の活用-. 日本食育学会誌. 8, pp.73-81.
- 上岡美穂・田中裕人 (2009) : 新聞記事数からみた食育関連情報と食育活動の推移. 日本食育学会誌. 3, pp.325-334.
- 上岡美保・吉田昂平 (2012) : 教育者の視点からみた食育推進の効果と期待に関する研究. 日本食育学会誌. 6, pp.273-284.
- 大石善也・久山佳代・田口千恵子他 (2009) : 柏市小中学生における食に関する課題学習の試みおよび食行動の実態調査報告. 日本食育学会誌. 3, pp.169-176.
- 大津山厚 (2013) : キックマンの食育への取り組み. 日本食育学会誌. 7, pp.293-298.
- 岡崎光子・磯菜穂子・三橋朋子 (2009) : 給食摂取量の向上を意図した児童への栄養教育の実践とその効果. 日本食育学会誌. 3, pp.49-64.
- 岡崎光子・堀端薫・三好恵子他 (2010) : 学校における栄養教諭の役割の現状と今後のあり方. 日本食育学会誌. 4, pp.9-20.
- 岡崎光子・飯島加奈子・小澤由佳他 (2012) : 児童の供食と生活習慣、健康状態との関係. 日本食育学会誌. 6, pp.9-20.
- 岡村絹代・若林良和 (2012) : 介護予防の観点から元気高齢者が地域食育システムの担い手となる要件

- 高齢者食生活改善推進員の活動の分析から—
日本食育学会誌. 6、pp.163—172.
- 小川宣子・長島万弓 (2010) : 食育における食環境づくりの重要性-岐阜県の体制から考える. 日本食育学会誌. 4、pp.3—8.
- 加賀谷豊・後藤亜弥 (2013) : 味の素(株) 食育活動出前授業「だし・うま味」の味覚教室. 日本食育学会誌. 7、pp.299—302.
- 鎌田久子・蓮見美代子・相川りゑ子 (2013) : 栄養士養成課程における献立作成能力に関する研究—献立作成に関連する要因の検討—. 日本食育学会誌. 7、pp.275—284.
- 岸田恵津・秋田真澄・増澤康男他 (2008) : 児童の学びに基づく働きかけが保護者の食生活改善意欲に及ぼす影響-兵庫県 A 小学校 6 学年の食育実践の事例—. 日本食育学会誌. 2、pp.51—62.
- 岸田恵津・松井倫子・増澤康男 (2011) : 小学校の食育実践における「栄養・健康」に関わる学習内容の実施状況-兵庫県食育研究指定校の研究紀要を資料とした実践の分析—. 日本食育学会誌. 5、pp.105—110.
- 木山眞美・吉澤さやか・牧野紘子他 (2012) : 幼稚園における持参弁当を介した親に対する食育. 日本食育学会誌. 6、pp.215—224.
- 久保加織・竹本真理子・堀越昌子 (2009) : 男子大学生に対する調理実習体験の食育効果. 日本食育学会誌. 3、pp.307—316.
- 久保加織 (2011) : 食品ロス削減に対する生活者の意識構造. 日本食育学会誌. 5、pp.85—96.
- 小泉武夫 (2014) : 和食を支えてきた五大発酵調味料. 日本食育学会誌. 8、pp.249—254.
- 小島千明・柴英里・菊地るみ子 (2013) : 小学校家庭科における弁当作りに関する教材開発及び授業実践. 日本食育学会誌. 7、pp.171—180.
- 小西雅子 (2010) : 子どもの「食の自立」と「五感の育成」を目指した食育の取り組み. 日本食育学会誌. 4、pp.159—164.
- 五明紀春 (2011) : 食育実践のカテゴリー-事例報告を参照して-. 日本食育学会誌. 5、pp.67—84.
- 櫻井久美子・下村美恵・松永泰子他 (2013) : 高等学校における食事バランスガイドを活用した食教育の試みとその検証. 日本食育学会誌. 7、pp.197—204.
- 佐藤幸子・栗原宏美・南波美穂他 (2009) : ハーブ栽培のフードサイクル ; 食育カリキュラムの実践事例. 日本食育学会誌. 3、pp.347—354.
- 佐藤みずほ・中野冠 (2013) : 食料品専門スーパーにおける食品廃棄物発生の解析と低減化を目指す従業員教育のための意識調査. 日本食育学会誌. 7、pp.259—274.
- 島村光治・津村哲司 (2013) : ギムネマの 1 人 1 鉢栽培による味覚への意識向上-愛知中学校 2 年生での教育活動について—. 日本食育学会誌. 7、pp.167—170.
- 島村知歩・三浦さつき・池内ますみ他 (2008) : 魚介・肉料理を中心とした大学生家庭の食事実態. 日本食育学会誌. 2、pp.63—72.
- 生源寺眞一 (2007) : 食と農をめぐる今日的課題 : 食料自給率から読み解く. 日本食育学会誌. 1、pp.22—31.
- 菅原千鶴子・森谷紜・清水やよい他 (2012) : 就学前の子どもを育てる母親に対する継続食育教室の効果. 日本食育学会誌. 6、pp.183—196.
- 砂見綾香・多田由紀・梶忍他 (2012) : 幼稚園児及び保護者に対する食育プログラムが両者の食生活に及ぼす影響. 日本食育学会誌. 6、pp.265—272.
- 瀬尾知子・榊原洋一 (2014) : 幼児期の共食の意味理解—幼児は共食をどのように捉えているのか?—. 日本食育学会誌. 8、pp.3—8.
- 瀬戸美江・木村小百合・山田仁美他 (2012) : 専用調味料の使用状況と今後の課題. 日本食育学会誌. 6、pp.225—230.
- 曾我部夏子・祓川摩有・丸山里枝子他 (2009) : 体験型環境教育で実践した小学生を対象とした食育について. 日本食育学会誌. 3、pp.99—104.
- 曾我部夏子・西浦千尋・佐藤由美他 (2011) : 栄養教育で実施した男性労働者の食生活調査. 日本食育学会誌. 5、pp.19—24.
- 曾我部夏子・西浦千尋・佐藤由美他 (2011) : 企業で実施した栄養教育プログラムにおける骨量測定の調査報告. 日本食育学会誌. 5、pp.203—208.
- 曾我部夏子・篠原能子・西山一郎 (2013) : 地域で実施した食育イベント参加者の食生活に対する意識の検討. 日本食育学会誌. 7、pp.57—64.
- 曾我部夏子・岡田昌己・土岐田佳子他 (2014) : 女子中高生サッカー選手の身体状況および食生活についての検討. 日本食育学会誌. 8、pp.41—48.
- 曾我部夏子・篠原能子・西山一郎 (2014) : 地域と学園祭で実施した食育イベント参加者の食生活に対する意識の比較. 日本食育学会誌. 8、pp.173—180.

- 曾我部夏子・田辺里枝子・祓川摩有他 (2014) : 1歳2か月児における母乳・ミルク・牛乳の摂取状況と食生活との関連の検討. 日本食育学会誌. 8、pp.273-282.
- 外山紀子・野村明洋 (2010) : 保育園の作物栽培実践に基づく食物の生産過程に関する学び. 日本食育学会誌. 4、pp.103-110.
- 外山健二・小松啓子 (2012) : 食生活の低下を伴う女子大生における味覚感受性と精神健康度との関連性について. 日本食育学会誌. 6、pp.61-68.
- 高嶋真衣・西川和孝 (2014) : 中学校時における食体験が大学生の食実践力に及ぼす栄養とオリーブ果実を用いた教材研究. 日本食育学会誌. 8、pp.121-128.
- 多田由紀・川野因・森佳子他 (2010) : 大学生における食事に関する知識と生活習慣の関連 : 農学系大学における検討. 日本食育学会誌. 4、pp.213-222.
- 津田淑江 (2009) : モデル献立から算出したライフサイクル CO2 評価と食育. 日本食育学会誌. 3、pp.29-38.
- 土田裕美・山下房江・青山妙子 (2013) : 特別支援学校 (視覚・知的・肢体不自由) 教員の食育に対する意識と食育実践の現状と課題—食育に関するアンケート調査から見えてきたもの—. 日本食育学会誌. 7、pp.285-292.
- 土田裕美・青山妙子・山下房江 (2014) : 地域の食育イベントに参加した子どもたちに見る家庭における緑茶文化の継承の実態と体験活動プログラムの効果の検証. 日本食育学会誌. 8、pp.291-300.
- 津村哲司・島村光治 (2010) : 食生活改善に向けた新手法の開発—味覚教育からのアプローチ—. 日本食育学会誌. 4、pp.83-90.
- 土岐田佳子・曾我部夏子 (2014) : 地域のプレイルームを利用した幼児及び母親の食生活に関する調査. 日本食育学会誌. 8、pp.283-290.
- 内閣府 (2014) : 平成 26 年版食育白書、勝美印刷、p.162.
- 仲井宏充・友清雅子 (2010) : 朝食欠食に関連する因子について—佐賀県県民健康意識調査の結果からの考察. 日本食育学会誌. 4、pp.181-186.
- 中川原康子・三浦綾子 (2014) : 成長過程における食物アレルギー児と非食物アレルギー児の疾患知識と意識の関連性. 日本食育学会誌. 8、pp.29-40.
- 中村修・宮崎藍・渡邊美穂 (2007) : 食育活動の現状と課題. 長崎大学総合環境研究. 10、pp.11-16.
- 農林水産省 (2012) : 平成 23 年度生活及び農林漁業体験に関する調査. 株式会社流通システム研究センター、p.30.
- 野間智子・木村寿佳子・坂元亮介他 (2008) : 「手コマ式食育指導プログラム」の開発とその食育への実践的活用. 日本食育学会誌. 2、pp. 159-166.
- 野間智子・山本香苗・近藤佳代他 (2013) : 聴覚障害者を対象とした「食育プログラム」の実践—特別支援学校及び啓発講座での食育の取り組みについて—. 日本食育学会誌. 7、pp.65-74.
- 濱口郁枝・奥田豊子・内田勇人他 (2012) : 大学生に対する食育の効果の検証. 日本食育学会誌. 6、pp.249-256.
- 濱口郁枝・奥田豊子・内田勇人他 (2012) : 大学生に対する食育が食行動に及ぼす影響. 日本食育学会誌. 6、pp.257-264.
- 原正美・牛田奈津実・河野綾子他 (2011) : 女子大生の嗜好変化. 日本食育学会誌. 5、pp. 97-104.
- 原正美・山本実里・神保忍他 (2011) : 女子大学生の幼児期と現在における食品の好き嫌いの変化. 日本食育学会誌. 5、pp. 209-216.
- 原正美・松原知代・山口公一他 (2013) : 母乳中のアレルギー濃度と食事との関連—ELISA 法による検討—. 日本食育学会誌. 7、pp.13-20.
- 原正美・長谷川俊史・松原知代他 (2013) : 母乳中のアレルギー濃度と食事との関連、続報—母乳中のオボアルブミン濃度とラクトフェリンについて—. 日本食育学会誌. 7、pp.155-160.
- 原田恵美・岸田恵津 (2011) : 給食を活用した食に関する指導の支援—栄養教諭から学級担任への指導者用メモの配付を通して—. 日本食育学会誌. 5、pp.141-146.
- 樋口才二・小山清人 (2013) : 上新粉を含む米粉食パンの製造方法と力学特性及び官能検査. 日本食育学会誌. 7、pp.129-136.
- 日田安寿美・山中朋美・永田薫他 (2013) : 男子高校生のヘモグロビン濃度には BMI と身体活動レベルが関連している. 日本食育学会誌. 7、pp.33-40.
- 平野繁 (2014) : 日本の土地利用型農業における大規模化の現状. 日本食育学会誌. 8、pp.95-104.
- 廣瀬順子・長尾早枝子 (2013) : アイマークレコーダーによる母乳栄養指導時の観察ポイントの検討. 日本食育学会誌. 7、pp.161-166.

- 藤澤良知(2011):心を育てる食育. 日本食育学会誌. 5、pp.3-8.
- 藤原有子(2012):知的障害児の食行動の実態(主食編). 日本食育学会誌. 6、pp.69-76.
- 藤本勇二(2009):交流学習が支援する食育-とくしまみそ汁プロジェクトの試みを通じて. 日本食育学会誌. 3、pp.105-110.
- 古谷かな恵・堀田千津子(2013):女子大学生における健康目標の有無による健康行動の相違. 日本食育学会誌. 7、pp.49-56.
- 堀田千津子・高田晴子・木村友子他(2008):幼稚園児と母親に対する食育プログラム実施の効果. 日本食育学会誌. 2、pp.141-148.
- 堀田千津子・木村友子・内藤通孝(2009):幼稚園児と育児担当者に対する「食育だより」を活用した食育の効果. 日本食育学会誌. 3、pp.335-346.
- 堀田千津子(2010):母親の栄養成分表示利用行動と幼稚園児の間食との関連. 日本食育学会誌. 4、pp.165-170.
- 堀田千津子(2012):小児生活習慣病予防の食育-食育通信による間食指導の効果-. 日本食育学会誌. 6、pp.231-236.
- 堀田千津子(2013):幼稚園児と母親に対する食育活動-調理体験教室における効果-. 日本食育学会誌. 7、pp.119-128.
- 堀田千津子(2014):幼稚園児と父親に対する食育活動-調理体験教室における効果-. 日本食育学会誌. 8、pp.19-28.
- 本田藍・中村修・片渕結子(2010):義務教育における学習と大学生の食生活、生活習慣病予防態度との関連. 日本食育学会誌. 4、pp.91-102.
- 的場輝佳・園部晋吾・前野素子(2014):小学校における“日本料理に学ぶ食育カリキュラム”-京都市教育委員会とNPO 法人日本料理アカデミーとの連携-. 日本食育学会誌. 8、pp.151-160.
- 的場輝香(2014):和食の魅力とルーツを探り、次世代に継承することの意義. 日本食育学会誌. 8、pp.255-262.
- 三田村理恵子・葛西隆則・西村孝司(2010):ヘルスツーリズムにおける食育プログラムの基礎的検討. 日本食育学会誌. 4、pp.171-180.
- 村井陽子・奥田豊子(2007):小・中学生の伝統的食材および簡便食品の摂取度と自覚症状の関連-食の簡便化と伝統的食材に関する食育の重要性-. 日本食育学会誌. 1、pp.3-10.
- 村井陽子・越川絵里子・奥田豊子(2008):高学年児童の食生活と学習態度・意欲や健康状態との関連-楽しく食べることの重要性-. 日本食育学会誌. 2、pp.3-10.
- 村井陽子・越川絵里子・奥田豊子(2008):高学年児童の学校給食への関心と学習態度・意欲や健康状態との関連-学校給食を通じた食育の重要性-. 日本食育学会誌. 2、pp.43-50.
- 村井陽子・八竹美輝・奥田豊子(2011):小学生における食事バランスガイドを活用した食育の効果. 日本食育学会誌. 5、pp.9-18.
- 村井陽子・丸谷宣子・山本麗奈他(2012):食育を目指す学生による食に関する指導の効果-小学2年生を対象とした実践-. 日本食育学会誌. 6、pp.173-182.
- 村井陽子・奥田豊子(2013):6種の豆料理に対する嗜好性と調理意欲-小学生の保護者を対象とした質問紙調査より-. 日本食育学会誌. 7、pp.205-212.
- 村井陽子・奥田豊子(2014):豆調理頻度向上を目的とした印刷媒体による教育効果-小学生の保護者を対象として-. 日本食育学会誌. 8、pp.111-120.
- 村上陽子(2012):マカロンの色彩構成が大学生の食嗜好性に及ぼす影響. 日本食育学会誌. 6、pp.21-34.
- 村上陽子(2012):家庭科教育における鶏卵起泡性の実験授業の開発-マカロンを用いた授業の基礎資料として-. 日本食育学会誌. 6、pp.35-50.
- 村上陽子(2013):練りきりの色彩構成が幼稚園児及び大学生の食嗜好性に及ぼす影響. 日本食育学会誌. 7、pp.3-12.
- 村上陽子・巽和枝・奥田豊子(2013):実習豆献立を家庭で作る意欲とその関連要因-幼稚園・小学校保護者を対象とした豆料理講習会から-. 7、pp.41-48.
- 村上陽子(2014):中学生における和菓子の食嗜好性と食行動. 日本食育学会誌. 8、pp.263-272.
- 村田光範(2007):小児のメタボリックシンドロームについて. 日本食育学会誌. 1、pp.32-46.
- 村本由佳利・江頭香衣・鎌田早紀子他(2013):望ましい食生活への理解を目指した食育プログラム-小学6年生を対象として-. 日本食育学会誌. 7、pp.137-154.
- 森佳子・目加田優子・秋山嘉子他(2009):更年期女性の骨量低下と運動、食生活の関わり. 日本食育

学会誌. 3、pp.91-98.

森佳子・日田安寿美・多田由紀他 (2011) : 山梨県小菅村における食材の活用および調理法に関するアンケート調査. 日本食育学会誌. 5、pp.25-30.

山本泰 (2009) : みその素晴らしさを知る. 日本食育学会誌. 3、pp.15-28.

弓削公・小田博雄・斎藤滋 (2009) : 食育における食行動指標の客観的評価法-学校給食時の食行動の関連性から-. 日本食育学会誌. 3、pp.39-48.

豊俊幸・大友可奈子・横川千花他 (2008) : 父母・幼児に対する食育の取り組み方法の模索. 日本食育学会誌. 2、pp.167-176.

豊俊幸・大友可奈子・横川千花他 (2009) : 幼児と保護者に対する食生活に関する意識とその経年変化. 日本食育学会誌. 3、pp.317-324.

横田直子・坂本裕子 (2014) : 短期大学における栄養教諭養成の現状と課題-卒業生の追跡調査結果の報告-. 日本食育学会誌. 8、pp.143-150.